

非現実的な夢

編集長の勝手な独り言

—そもそもどんな夢も概ね非現実的なものである—



写真・文：まほろば編集部 島田 浩

お先真っ暗な世界情勢？

なんだかアヤシイ雲行きである。ことさらに危機を煽るトランプと、隣国。激動する世界と日本。このまま戦争まで発展したら大変なことになる。私たちは、いったいどうすれば良いというのだろうか。

そこにあるプラスの意味は？

しかし、どんな状況にも必ずプラスの意味があることをこれまで学んできた。もし、そうであるならば、この状況の意味するものは何か？ そこにどのようなプラスの意味があるのかを考えてみたい。

なぜ世界はこのように問題だらけなのか？

「宇宙は私たちの覚醒を待っている。」

そんな言葉が突然ひらめいた。いったいそれはどういう意味だろう。

あらゆる問題の真の原因とは

そもそも、あらゆる問題に横たわりながら、多くが見過ごされている根本原因がある。それは、「私」と「私以外」の分離である。

私たちは、誰もみな自分と自分以外は別々の存在だと信じている。これは洗脳のごとく私たちにしっ

かり植え付けられてしまっていて、誰もみな疑問に思わない。

実は、それが大きな問題なのだ。「私」と「私以外」があるというこの分離感ゆえに、私たちは誰かと争い、自分以外である存在を虐げ、自分の利益のためなら自然や環境を平気で汚染し破壊できるのもそれ故である。

もし、すべてが自分自身だとしたら、簡単にそのようなことはできないだろう。しかも、「自分」と「自分以外」があるという価値観を作り出してしまったがために、自己と他者を比較し、威張ったり、あるいは落ち込んだり、そのあげく自分自身をも責めたりするようにまでなってしまった。そこから生じる競争社会のなれの果て、すっかり

殺伐としてしまった現代は、その最たるものだろう。すべて、あらゆる問題の根にある「分離の幻想」が生み出したのだ。

破壊を進める文明社会

いったい何時からそうってしまったのか？ おそらくは、有史以来、文明社会というものの中で脈々と続いてきたのではなかろうか。自分と自分以外があることで、支配者は容易に人を支配できるようになるのだから。



この分離と対極にあるのが、生命の一体感、あらゆるものが「ひとつ」につながる価値観である。

古来、東西の宗教や英哲が述べてきた空の世界観、さらには近年の量子物理学者が唱える量子の世界観、それはこの宇宙がすべて同じ要素で構成され密接につながりあう、大いなるひとつの存在であるという。「私」は「あなた」であり、すべての一部なのだ。この考えこそが現状を打破するカギになるのではないだろうか。

実際、人類史にはそんな社会も存在してきた。身近なところでは1万年以上も争うことがなかったといわれる縄文の世界だ。また、分離感ゆえに生命を簡単に踏みにじることのできるその凶暴な文明社会によってすっかり^{せんめつ}殲滅されてきた、アイヌやネイティブアメリカンなど、世界中の先住民族にみられる、大地と自分たちの強いつながりと一体感を持つ人々である。

彼らは大地に祈りと感謝をささげ、あらゆる存在を兄弟姉妹として敬った。彼らの世界に環境破壊はなく、争いごととはごく限定的であった。

このすべてが「ひとつ」であるという事への気づきこそ、まさに今、この時代に必要とされているのではないかと思うのだ。あらゆるものが「私」であるという気づき。その時、これまでと全く異なる新たな地平が開かれるのだ。

この、これまで脇に除けられてきた古くて新しい真実への気づきこそ、いま私たちに求められている「覚醒」ではなかろうか。

それは、ほんとうは特別なことではなく、幼子のような無垢な心で世界を見ることが

できること、また、あらゆる囚われから解放され自由であり、この宇宙の真実がわかり、宇宙と調和した生き方ができるようになること、さらにいえば、生まれてきた魂の目的を思い出し、心のままに生きることができるようになることだろう。

制限のあるこの地球に生きる意味とは

臨死体験者の報告によると、人はこの肉体を脱ぎ

捨てたら、そんな宇宙と一体感を覚えるような覚醒状態になるようだ。それならば、わざわざすっかりその状態を忘れて、ふたたび制限に満ちたこの地球に生まれ変わる意味とは何だろうか？

ブライアン・L・ワイズ博士をはじめとする多くの研究者らの報告によると、それは、「たましいの進化向上」であるという。有限の肉体を持つという、この不自由な世界の中で、人格を向上させるのだ。それは、社会の規範に従うイイ人になるという単純な意味ではない。良いことも悪いことも含め、様々な経験を積むことで深く思慮するようになり、やがて思いやりと本当の愛を知るようになるのだという。

この世に善悪はない

もし、すべてがひとつにつながっているとすれば、本来善も悪もない。それは昼と夜があるように、人体に善玉菌と悪玉菌があるように、悪もまた自然界の中で必要として存在しているはずだ。大切なのはそれを排除することではなく、バランスなのだ。もしそうならば、悪がある意味とは何か？なぜ世界はこのように問題だらけなのか？

実はこの人生劇場では、一見悪いと思われる出来事が逆に福音に変わるのだ。私たちはオギャアと生まれてから、しつけや教育でほんとうの自分の感情を押し込め、知らぬ間にすっかり型にはめられた人

生を過ごしてきた。そのことにさえ気づかないほどに…。しかし、事故や大病によって人生観が一変し、それまで以上に健康で自分らしく生きようになる人もいるのだ。

そのように、この混迷の世界がもたらす激震は、私たちが気づき、目覚め、本当の生き方を取り戻すきっ

かけとなるのかもしれない。そのためにこの地球が存在し、私たち魂の修業のため、またはその苦難を乗り越える歓びのため、あえてこの混迷があるのかもしれない。それが、この状況がもたらしてくれるプラスの意味ではなかろうか。

私たちにできる創造

もし、そうであるならば、私たち一人一人にでき



ることが、きっとあるはずなのだ。

目覚めて生きることの重要性は語りつくせないほどあるだろう。

何よりも真実が見えるようになるためには、感じる、自然から学ぶことが大切である。自然の美と創造性が私たちの中にも宿っているのだ。

そして、その創造性こそ、「ひとつ」への気づきから得られるもう一つの重要なファクターだ。すべてがひとつであるという事は、この創造性に満ちた宇宙と私たちが、ひとつにつながっているという事。その力を利用できる事になる。

この時、先に頭であれこれ考えるのではなく、むしろ感じることやインスピレーションとして訪れるその感覚をベースにし、その後でじっくり理性を使って形にすればいい。まずはイメージが大事であり、それを元にして創造の力を発揮させるのだ。

さらに、「ひとつ」という真理は、引き寄せの法則の根拠にもなるだろう。すべてがひとつだから、自分と宇宙とが調和した時に引き寄せの力が働くのだ。

真に望む生き方を心に描くこと

自分が幸せに暮らしている様子を心の中で繰り返してイメージしよう。この際、ことさらに不安に目を向けてはいけない。さらに悪い出来事を引き寄せてしまう可能性が高くなる。不安をあおることは洗脳の常とう手段である。先日の突然の警報にあおられ、私たちはすっかり不安に陥ってしまった。それは、私たちを思考停止させ、誰かの思惑通りに事を進めようとするための有効な手段ではなかったろうか。

大切なのは不安から行動することではなく、私たちのたましいの真の望みから行動することである。不安から生じる反対のための反対ではなく、真に望む生き方や暮らし方、社会の在り方を具体的に心に描き、行動してみよう。自分とすべてがひとつであることに目覚めた上で行う創造が大切だ。すべてひ



とつであるならば、すべてとつながる私の行動は全体に少なからず影響を与えるはずだから。それがどんなにちっぽけであったとしても。

「すべてがひとつ」で行う創造は、自分のために行うことが全体のためとなり、自分の歓びが全体の歓びにつながり、自分の健康が自然や環境全体の健康へとつながるのだ。そういう生き方を始めてはどうだろう。

そこから発想するならば、人間中心ではない、生命と調和した社会が再び生まれるのではないだろうか。

もし、私たちがほんとうにすべてとひとつならば、それは可能だと私は信じる。

この世の天国に生きる

そうして、各々の個性を輝かせ、この世を天国にすること。この世の天国で幸せに暮らすこと。それが私たち人間に与えられた使命ではないだろうか。

むしろ、本来この世はあるがままで天国として作られている。ただ私たちがそれに気づかず、互いにいがみ合っているだけなのだ。

おそらく形にとらわれる必要はないのだろう。私たちの心のあり方という無形の部分にスポットを当てただけで、この世は天国になるのだろう。

宇宙の真実を知り、人生に活かすこと。まずは、それだけで目の前にある小さな世界は変わる。自分とはすべてであり、そのすべてである自分を愛するのだ。最終地点をしっかりと思い描きながら、その一歩を、小さな一人から始めること。いま世界に起きている出来事は、私たちにその一歩を踏み出すように促しているのかもしれない。

人を変えようとするのではなく、すべてである自分を、望む生き方へとチェンジさせるのだ。その結果にきっと私たちは驚くことだろう。

管理社会のSFが現実

まずは、自分自身がどんな人生を望み、何を求め、これからどうありたいのか、はっきりさせることが

大切ではなかろうか。

今までのように、なんとなく生きていたら、これからは誰かの思うままに強制的に従わざるを得なくなるだろう。いや、すでにそうなっているのだ。

この世界は、ごく一部のスーパーリッチと呼ばれる資本家が、政治や経済を陰でコントロールし、彼らにとって都合の良い管理社会を生み出しつつあるという陰謀論の世界観がある。真偽のほどはさておいて、すでに、ケータイやスマホの位置情報や、主要幹線道路や町中のいたるところに設置された^{おびただ}夥しい監視カメラで、犯罪者の逃走経路が簡単に割り出せるインフラが整っているではないか。監視社会のための様々な法整備がなされ、現金決済が電子マネーとなり、メールやSNS、音声情報などの人間関係も、ネットの閲覧状況や商品の購入履歴も、すべてが電子情報として一元管理される。さらに先日のTV番組で取り上げられていたが、アメリカではすでに人体にマイクロチップが埋め込まれ始めているのだ。精密な電子機器でもある人体を、外部からコントロールされる可能性も否定できないだろう。それはもはやSFの世界などではなく現実なのだ。

今こそ立ち止まるとき

何も文明や技術の進歩を否定しようと思っていないわけではない。ハサミも包丁も使いようである。それはおいしい料理を生み出すために必要だが、使い方を誤ると凶器にさえなる。新しい技術は人を縛るためではなく、むしろ解放し、より自由にするためにこそ使われるべきであろう。

ところが、今や私たちはその便利で快適な技術や文明にすっかり心奪われ、それを維持するためにあくせくと働き、逆にそれらに使われているかのよう

にさえ見受けられる。人は、ますます自然の本質から遠ざかり、どこへ向かおうとしているのだろう。

今こそ、立ち止まり、自分が生まれてきた目的や意味、たましいの望む生き方や人生を、もう一度思

い出すその時ではなかろうか。まほろばが農に帰ろうとしているのも、まさに社長夫妻のたましいの望みに従った上でのことだと思う。多くのお客様が心から共感してくださるのもそのためだろう。

私たちは何を望むのか

本当に私たちは何を望んでいるのだろうか。私たちが望む平和とはいったいどんなだろうか？そこに真剣に焦点を合わせる必要があるのではないか。

心の中で、キムさんとトランプさんが互いに微笑み合い、にこやかに手を握り合っている様子を想像してみよう。ついでにプーチンさんや世界中の首脳が集まってきて、皆で手を取り合い、良い世界にしようと呼び合う様子を思い浮かべてみよう。

可能かどうかではない。私たちが何を望むのかが大切なのだ。戦争を望むのか、平和を望むのか？世界がほんとうに仲良くなるためにはどうすれば良いのかを、幼子のように考える必要があるのではないか。

今こそ、敵という幻、他人という幻、自分という幻からの脱却が必要なのだ。

その宇宙の本質への気づきこそ、平和への架け橋となるだろう。

そして、それぞれがその創造性を発揮して、心の

中に美しい世界を生み出そう。それは全てである宇宙の中に伝播し、やがて形を成すことだろう。

それを行うのは総理大臣でも、大統領でもない。私たち一人一人からだ。

すべてとひとつにつながる私たち一人から、今ここで始められるのだ。

もちろん、すぐに世界が平和に変わるわけではないし、当面の間は自分を守る最低限の注意は必要だろう。しかしいつの日か、世界中の誰もが「すべてはひとつ」である事に気づき、地上のあらゆる武器を捨て、真に平和な文明を創り出す日が実現することだって夢ではないだろう。

その願いが宇宙に響き渡ることを祈りつつ。

